

# 変わらないものは

九州支所長



今田 忠男

IMADA, Tadao

2005年の12月、ここ九州は鹿児島に88年ぶりの大雪である。88年ぶりという事は過去にも有ったと言う事で、記録が残っている。真っ白になった桜島を見る事が出来たのは幸運であった。しかし、南国での雪は、単身赴任に慣れたこの身ではあるが、予想とは大きく違うので寒さは身に沁みた。

今年の4月からは我々の組織が改革され、部室制からチーム制になり、職員の身分も公務員ではなくなる。しかし、これは自然環境(?)の変化ではないので、我々自身の考え方そして行動の仕方ですらも効率的になる可能性は有るものと考えている。

我々の組織の名前は、1891年(明治24年)に獣疫研究室として設置され、1921年(大正10年)に獣疫調査所として独立し、1947年(昭和22年)に家畜衛生試験場と改称され、2001年(平成13年)に独立行政法人農業技術研究機構動物衛生研究所と改組、改称、2003年(平成15年)に独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構動物衛生研究所と改組されて来ている。そして、2006年(平成18年)4月には職員の身分と内部体制が大きく変わろうとしている。

思い起こせば33年前に、今は無い鶏病支場に赴任してすぐに、職場の大先輩から、家畜衛生試験場の業務には3本柱があり、3本とも大切でどれかが欠けると旨く行かなくなると教えられた。その3本とは、1本目は畜産を獣医学的側面から支える調査研究、2本目は最新の知識と技術を駆使した病性鑑定、そして3本目は講習・研修であると。一人で同時に3つは無理だと感じた事を記憶している(支場には製剤業務は無かったので3本と述べられたと考えられる。)しかし、今考えると先輩は組織の業務と言っていた。我々の組織が設立され、そのサービスを提供する対象が広がり、組織が大きくなってきた理由がそこに集約されている

ように感じるのである。

日本の畜産が発展し、直面してきた家畜の伝染性疾病を中心とした生産性阻害要因による問題の解決のために、我々の前身組織は約100年前に設立された。この間、国際化が進み世の中が大きく変化して、組織も時代の流れとともに変化してきた。この世の中変化しないものは無い(無常)というのが真理であるということも少し理解できる年齢になってはいるが、我々の組織の存在意義は、組織が大きくなり、その名称が動物衛生研究所と改称された現在、以前よりは行うべき目的は増えてはいる。日本に畜産がある限り、創設初期の目的は変わらずに残っている。今回の大きな組織の改変は、厳しい将来見通しを踏まえたものとなるが、全職員が自ら組織の存在理由と存在価値を整理し直し、積極的に新たな目的を示す事が必要であろう。動物衛生研究所となって5年、家畜衛生試験場時代の前述の3本(製造業務を加えると4本)柱は旧体制を支えていたものかもしれないし、逆に旧体制があったからこそ立っていたのかもしれない。しかし、厳しい状況で体制が変わる時、これらの複数の柱を残し、さらに新しいサービスを提供するには、今までには無い工夫と取り組むべき研究課題や業務の優先順位、各自が持つ使命と役割分担を意識した行動力が必要である。先輩たちが残してくれた貴重な財産と研究環境を維持し、さらにそれらを基に発展させる為に再度確認し意識の中に残しておきたい。

ここ九州支所は、現在日本畜産の中心に近く、その現場が今も発展している。これらの複数の柱を残し、さらに新しいサービスを提供する為に、名実ともにチームとなり今回の改変のメリットを生かして我々の存在をアピールする事に努力していきたい。